

ワーキンググループの取り組み

各種施策を推進し、湖に流入する汚濁負荷量は減少しているが、湖内水質は横ばい(改善しない)。

原因は何か？宍道湖で何が起きているのか？

- ・ 流入負荷量はどの程度減っているのか？
- ・ 湖底からどの程度溶出しているのか？
- ・ 湖内でどんな現象が起きているのか？(植物プランクトン など)

メカニズム解明に必要なこと	H25までの到達目標	H26以降の取り組み
①流入実態の把握	斐伊川の流入負荷(水質、季節変動、負荷量)の把握 【斐伊川365日調査】 流入負荷量の把握方法(原単位)の妥当性の確認 【山林系原単位の見直し】 湖内水質への影響の把握 【斐伊川365日調査】	原単位の精度確認
②底質からの影響の把握	底質状況の把握 【底質調査】 水質への影響(溶出量)の把握 【湖心高頻度調査・底質調査】	
③湖内現象の把握	塩分成層の発生と解消等の把握 【塩分成層と貧酸素調査】 植物プランクトンの存在比の把握 【カロテノイド調査】 植物プランクトンの種毎のCOD等の把握 【植物プランクトン種によるD-COD影響調査】 難分解性有機物の割合を把握 【難分解性有機物調査】 シミュレーションモデルの構築	
④その他		湖岸帯生態系の構造と機能の関係の把握 施策効果が定量化されていない施策の定量化 など

水質改善に向けた効果的な施策につなげる。